

日本海地域の民族音楽研究 2009

2008年の研究内容（3年計画の1年目）

1. 日本海民族の音の輸入（他民族からの影響）流れ
2. 民族楽器のルーツ
3. 楽器の面白エピソード
4. 韓国（大韓民国）音楽調査から
5. 日本の音楽

2009年の研究内容

本年は、ロシアの民族音楽を題材に研究調査を行った。

1. ロシアの民族音楽現地調査

日 時：2009年9月22日～27日

訪問先：ウラジオストク経済サービス大学、ロシア国立音楽学校

行 程

9月22日 ウラジオストク着

9月23日：10:00～ウラジオストク経済サービス大学（学生2万人）国際会議を拝聴

：13:00～大学内の別の講義室にて日本の民族音楽を紹介し討論会あり。

（日本音楽の紹介と質問）

：17:00～学内の地域芸術コース（音楽～創作まで芸術指導を地域に開放講座あり）

視察と民族音楽の質問。

9月24日：9:00～楽器移動搬入（ロシア国立音楽学校：13～22才の芸術才能ある青少年が受講生＝音楽～創作芸術）

：11:00～博物館にて民族の生活資料を勉強

北海道大学スラブ民族研究会会員・加藤美保子氏と行動を共に。

：13:00～音楽ホール改装記念コンサート（中山妙子 recital）

ロシアの民族音楽演奏と踊り紹介あり。「さくら」合唱に感動

ロシアを想う「蒼い風」プレゼント演奏

：16:00～民族楽器の紹介&説明を学校長より受ける。

：17:30～音楽講師と調査内容の勉強会

9月25日：10:00 博物館にて民族の生活資料を勉強

北海道大学スラブ民族研究会会員・加藤美保子氏解説で詳細。

：13:00～ロシア国立音楽学校で音楽講師と音楽交流の歴史や音階の特色を勉強

9月26日：10:00～博物館にて民族の生活資料を勉強

：13:00～ルスキー島～金閣湾の視察 27日帰国



現地調査から

21 世紀の教育現場は世界の教育水準であり諸外国との交流もミュージカル音楽的の面は活性化しているが、少数民族(次ページのウデヘ族のように)の素晴らしい音楽性を伝統文化として保存&普及活動、指導する段階には至っていない。この現実には日本音楽の発展普及が明治維新の西洋音楽伝来で、かなり遅れている実態に類似している。子孫への教育指導者自身が民族音楽に関わる体験が少ないのも日本と同じ現状であり、「民族音楽の未来」の課題といえる。(その後も PC 調査交流を継続中)

2 . 民話に残る民族音楽の歴史研究

その1 (民話紹介) モンゴル~「ス - ホの白い馬」



むかし、モンゴルの草原にスーホという、貧しい、羊飼いの少年が祖母と住んでいました。働き者の歌のうまい少年でした。ある日、スーホは白い子馬を見つけ、仲良くくらししていました。・・・ある年、町で「競馬の大会があり1等には、とのさまの娘と結婚させる」知らせがあり、仲間の羊飼いから薦められ、大会に出ました。みごと、スーホの白い馬が1等になりました。ところが、貧しい身なりの少年に銀貨を3枚やり、約束を破り、白い馬を取り上げてしまいました。スーホは悲しみながら暮らしていました。ある日、他の国からお客様がいらして、とのさまは、自慢の白い馬にりましたが、馬は、家来に矢をうけながら傷ついて、必死でスーホのもとに、帰りました。傷口から血が噴き出して弱りはて、死んでしまいました。でも夢の中で白馬は「悲しまないでください。私の骨と皮と筋と毛を使い、楽器を作って下さい。そうすれば、私は、いつも あなたの傍にいますから」と言いました。そして馬頭琴ができました。

やがてこの楽器(馬頭琴)の音は広いモンゴルの草原に広がりました。羊飼いたちは、その美しい音に耳をすまして一日の疲れを忘れました。

その2 (民話紹介)ロシア~「ウデへの昔話」



ウデへは日本海の向こう北側、ロシア極東の沿海州に住むツングース系の少数民族です。この絵は村の子供たち水彩で描いたものです。ウデへには、もともと文字がなく、ロシア語で語り伝えられたものを翻訳した民話です。

「タルメニとセレメニ」 むかし、ひとりの若者が毎日、狩をして暮らしていた。「どうして、俺はひとりぼっちなんだろう？俺はどこから生まれたのだろう？探しに行こう」まずは南にむかったら、ヘラジカを見つけた。そして、皮をはぎ、肉を焼き、焚火を燃やした。夢の中で3羽のカササギが来て、娘たちの姿に変えて話し始めた。「この若者はタルメニ(樹皮の人)よ。小さい時に一族が的に襲われ、全滅させられたのだよ。親が樹皮をかぶせて守りタルメニが生き残ったのだよ。弟のセレメニ(鉄の人)は鉄釜をかぶせて隠し生き残ったのだよ。母親と父親は牢に入れられたのだよ」

目を覚ました若者は山や谷をかけぬけた。

私は若きタルメニ 南をめざして、ひた走る

弟さがして山や谷 ベトゥー、ベトゥー！

途中でプジ（姉）とアジガ（妹）に出逢い、4人で大きな海へ こぎ出した。そして両親を探し助けて、兄弟は姉妹と結婚して故郷に帰り、長生きして、たくさんの子供に恵まれて幸せに暮らした。

その3 「チョウセンニンジン堀りの若者」は類似した正義感の民話

貧乏な村の若者がチョウセンニンジンを掘り当てて満州人に大金で買ってもらい故郷に帰り、長生きして、たくさんの子供に恵まれて幸な家族を作る物語

その4 「戦う民話：英雄伝＝イリヤー・ロミエツ

預言者イリ ヤにちなみ、名付けられた青年が（30歳まで手足が動かなかった）ある日3人の老人に声をかけられて立つことができるようになり、強い力をもらい正教のために、国を乱すものと戦い、弱いものを助けるために、この力を使うことを約束した物語。

以上が日本海地域の民話であり音楽の原点＝発生の意味&価値と理解できる。

韓国とはまた異なる大きな自然風土に適した生活文化である。

スラブ系ウラジオストクの先住民の民話は北海道大学「スラブ研究会」研究員に下記の資料を推薦いただいた。日本で紹介されているのは

「おおきなかぶ」のおはなし＝ウラジーミル・プロップ

「ベリア民話集」斉藤君子編訳

踊りが伴うのも特色であり、小躍りと風のような優雅さが含まれている。

3. ロシアの先住民族の音楽の特色

邪悪な敵と戦う力がない時の夢ものの語りに道徳観、が繁栄されており、いかに生きるべきか？を学び、孫の生活を守る文化が伝承された。それは動物と生物すべてとの闘い&共生から得た音＝伝達手段である。

和声も楽器も無いウデへの歌はシンプルで無調であるが、世界中の音楽家を感動させ、深く、魅了させる。

ある時は鳴き声、

ある時は号礼

ある時は風になり花になり

「全音＋半音＝ドミファ・・・ミファラ・・・シドレ～のように変化する流れを音階とは言いきれない特性が美しい。

日本の陰旋律の音階でロシアの大地を楽譜にして・・・
大地や風の音を演奏を試みた。ロシア国立音楽学校の子供たち&先生方に感動された。
(添付写真)日本の「さくらさくら」を直ぐに覚え合唱できた。つまり、日本海地域の民族には日本の「ミファラシレミ～」が受け入れやすいようである。

- ・民族楽器はすべて日常生活用品であった。
- ・日本の祭り音楽の演奏に強い関心を持つ民族であった。
- ・気温の低い地域には「掛声、叫び声、短いリズム、踊り」が共生する音楽の特色あり。今後の研究で、さらに解明したい。

4 . 民族音楽の現在のまとめ

地球上の民族の多くは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という一神教の宗教文化を風土にもち、今日の歴史文化を育て、世界の民族は、自分たちが愛する楽しい音 = 音楽を育ててきた歴史がある。

民族音楽は、何かを否定するのではなく、自らの生活を守り、平和を愛し、より豊かな生活文化をめざして、楽しむ音こそ、民族音楽の原点であろう。

日本海地域にはアニミズム・自然崇拜の多神教の歴史もまた、平和を願う音楽文化を育てている。そのことを理解しつつ、日本海地域の音楽特色の研究調査を深めていきたい。沖縄・琉球音階～日本音階まで・・・少しずつ共通点を見つけながら・・・。

“ ロシアを想う ” 中山妙子作曲・桑原志音編曲

蒼い風

中山妙子
桑原志音

♩ = 120

The image shows a musical score for the piece "蒼い風" (Blue Wind). It is arranged for Violin, Flute, Koto, and Piano. The score is divided into three systems. The first system shows the beginning of the piece with a tempo marking of ♩ = 120. The Koto part has a performance instruction "(つまびくように)" above it. The second and third systems continue the piece, with the Koto part showing some rests and dynamic markings like "f". The Violin and Flute parts are mostly silent in this section.

善い風

al tempo

The musical score is arranged in four systems, each with four staves: Violin (Vln.), Flute (Fl.), Koto, and Piano (Pno.). The key signature is one flat (B-flat major or D minor), and the time signature is 4/4. The first system includes a tempo marking of *al tempo*. The Koto part features a complex rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes. The Piano part provides harmonic support with chords and arpeggios. The second and third systems continue the melodic and harmonic development. The fourth system concludes with a double bar line and a final chord. The page number - 2 - is centered at the bottom.

- 2 -